

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

高松出張で思ったこと

讃岐では「うどんは噛まずに飲み込むもの！」と言わらしい。

セミナーのご依頼をいただき、以前も高松へ行く機会があったが、今回も東京からタイトな時間で訪問したので、午後のセミナーに向けて昼食時間があまりとれなくなりました。

そこで地元のおうどん屋さんに入れて行かれ、讃岐うどんを食べた。お盆にうどんを乗せ、自分でつゆを足し、好きなてんぷらを取るオートメーションスタイルだ。地元の人がおいしいと言っただけあり、大変な繁盛ぶりだ。席を見つげるのも大変だった。食べるのがまた本当においしい！にこにこ喜んで食べていたのだが、同行して下さった男性は、大盛りにも関わらず私がまだ半分も食べ終わらないうちに済ませていた。何で？ と周りを見回すと、前の席に座っていた女性もソルッ！と口の中に入った途端に呑み込んで、あっという間に食べ終わる席を立った。とても噛んでいるとは思えない。どうやら私だけが、一杯のうどんをそのそといつまでも食

べていて、同行者は「早いと思っただが、選択を間違っただかな……」とつぶやいていた。

それでも午後のセミナーに間に合うことができ、無事に終わった。二部の相談会では、祖父母を看取り今度は息子一家と二世帯で暮らすリフォームを考えている方と話をした。今までの同居型二世帯住居ではなく、キッチンだけは別にしたとおっしゃる。代が替わっての再度の二世帯住宅だ。それは高松に限ったことではなく首都圏でもよく聞く話だ。違っているのは既に息子さん一家は近くに住んでいて、どうやら家賃の問題もさしたることはなく、いつまでにリフォームを終えて同居しなくてはという切迫感がないことだ。

家賃が高く、同居すると決まったならば一カ月でも早く退去して賃料出費をなくしたいという東京近郊の事例とは違っている。既に学区内に住んでいるので学校問題もない。ネックは先代の荷物の整理がなかなか進まないこととおっしゃっていた。別の家を確保す

るよりも親の家の方がお得でお手軽だと、経済が優先されて二世帯にすることが多い都心部の話とは事情が違うようだ。まだまだ跡取り意識もあり、この方は長男一家との同居を考えているそうだ。

各地で住宅事情は大きく違う。おそらくこの地も土地代金よりも家の建設費の方が高い土地柄だろう。買える土地の大きさによって建てる家の大きさが決まってしまうのとは違い、ここではこの大きさの家がほしいからこのくらいの土地を探すということが可能だろう。何ともうらやましい話だ。瀬戸内海の穏やかな気候とともに、人々もゆとりとした人生を楽しんでいるように思えた。

だが残念なことに、街を歩くとどの都市にも進んできてしまったシャッター通りが目につき、地域の抱える問題は経済を基盤に職場の確保など住宅問題だけではない、もっと別の深刻さがありそうだ。

首都圏の一局集中はここらで留まり、地域の良さが活かせることを、各地に行くたびに願うばかりだ。



西田恭子氏のプロフィール
 一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。